



Handwritten Japanese text on a heavily damaged, aged paper document. The text is arranged in vertical columns and includes characters such as 龍 (Ryū), 田 (Ta), 却 (Kaku), 海 (Umi), 町 (Chō), 郎 (Rō), 花 (Hana), and 里 (Ri). The paper is significantly stained with dark ink or water damage, particularly in the center and right-hand side.





Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho). The text is arranged in two vertical columns. The right column contains the characters 米 (rice) and 子 (child), likely forming the name 米子 (Yoneko). The left column contains the characters 形 (shape/form) and 記 (record/note), likely forming the name 形記 (Yōmei). The characters are written in black ink on aged, yellowish paper.



多う

曲出一拍子止  
佐中 立

第 和

教への道も秋津國に投あ

法とたぶめを是の六十翁子

清經と初る聖うと我此程さ

南都よんひく、其佛宮社跡をく

たうかめく、その是より龍田

越よさうげ内國のうらさう作







かゝる葉してかへりぬる音

思のちたる龍田川紅葉みして

流らぬらづら錦中音夜のしら

古まじり音思のち中音の

事はなむかへり秋の夜はしら

錦音もあはれらづら錦

中も絶えぬなるはしら音

もあはれらづら錦

秋の夜はしら

もあはれらづら音

もあはれらづら

もあはれらづら

もあはれらづら

もあはれらづら











神子まつ事なる者縁り松元同  
塵の結縁のそめバ相成道入利  
物入終り下紅紙しりまある  
津うろ和えの影のまきうて抄  
と守り給へや上書月神文子汝度わ  
ぬさぬあへ怒折あるまうろして  
かきあもあらせぬさ神まうろ神

さひらつ後もすこむる龍田の  
ほろあちう音も粒ゆえまうろ  
夕暮いさ宮めらうそめしてあま  
ぼ龍田山周にかりめらうろ  
うろくまじ女子がうろこまうて  
神をかりあふあゆまうろ  
だひりあもからる龍まうまあ



今まてのきこしなまに  
神のまこととて此邦の龍田ヤハタ唯のま  
たうとらる業もあつた  
をひらしてこれお井の神を打つ  
守垣の戸をびとをひらき  
しきまらば日くく神のま前子  
痛むとてさうさうさう

なまに  
神のま前神とてさうさうさう  
龍田のりり龍田とてさうさうさう  
てまねがうかとも神ま  
月月のま月とてさうさうさう  
とらる業もあつた  
かまはくあつたよ神神神はく



とれりき 神初より  
此秋津國の地と云ふなり  
まさりて赤糸と守護し  
乃色もいほの葉の糸  
成べし 秋の法師の法味  
夜半の神燈ありて  
たままつるる神祇とす

當社のありありあり 天祖を  
カミとのり来ありて  
カミの當國寶山より  
たはぬあつたなり  
ゆゑのなるも偏に  
秋の雲方より  
カミの目あり



















老も角もあて作らるる卵面へ  
出らるる洗由と申すも思ひ作  
<sup>レ</sup>何れもきりきりきりきりきりきり  
面白く作らるる鵝毛子似く  
あつて散乱し大ハ鶴齧もまて  
立て徘徊もとらるる今ある  
雪もが見らるる雪もが  
霧齧もまてまてまて徘徊も  
くらく袖も細布衣陸奥のま  
のまのまのまのまの面白く  
まのまのまのまのまのまの  
大まのまのまのまのまの  
所へそまのまのまのまの  
一おの宿と行はるる留守の



り申て久ハ古海に返り候あり  
はより修行の長に修く御入り

梅を修行の長に修く御入り

あはれは入<sup>コ</sup>我々の事あはれ未

日ハきく候人あはれ修く人あはれ

あはれは入<sup>コ</sup>候人あはれ一夜の宿を

御入<sup>コ</sup>候人あはれ一夜の宿を

多うよん者あはれ候人あはれ宿入り候

ま<sup>コ</sup>あはれ見者あはれ候

う<sup>コ</sup>あはれ候人あはれ候

あ<sup>コ</sup>あはれ候人あはれ候

あ<sup>コ</sup>あはれ候人あはれ候

あ<sup>コ</sup>あはれ候人あはれ候

あ<sup>コ</sup>あはれ候人あはれ候











時つ子嬢持子作りたふお花取て  
舞つてけし栗とかが古(母)おる

恋ふくもあはれおれん  
給へん<sup>テ</sup>な<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>

作へん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>  
食ひおれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>

まゝおれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>  
しおれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>

食ひおれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>  
な<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>

おれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>  
おれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>

おれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>  
おれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>おれん<sup>テ</sup>



















口平  
何れも誰れも及ばぬ事

自然の時り為さく行の者も

も御の守り多し人 武も及行

も御の守り多し人 武も及行

世の事も多し人 武も及行

横の敵も多し人 武も及行

も御の守り多し人 武も及行

の事と多し人 武も及行

鎌倉へ多し人 武も及行

軍の事と多し人 武も及行

も御の守り多し人 武も及行

が事と多し人 武も及行

又あつた馬も多し人 武も及行

気も多し人 武も及行







梅ツバキくクるル目メしてシ...

しシ宿ヤドのノ夜ヨ...

まマのノ宿ヤドのノ夜ヨ...

宿ヤドのノ夜ヨ...

軍イクサのノ夜ヨ...

舎ヤのノ夜ヨ...

法師ホウシのノ夜ヨ...

披ヒ露ロ

乙ニ方ハのノ縁ヰのノ夜ヨ...

給タマフのノ夜ヨ...

杉スギ人ヒトのノ夜ヨ...

行ユクのノ夜ヨ...

東ヒガシ八ヤチヶケ園ヰのノ夜ヨ...

入イルのノ夜ヨ...



きけりわきま金銀とのたふきむり

かひよきしる馬の葉びんくは一回から

むやうまがらわくらくお中よき一車り

きよき替りしる馬ののらむらむら

このまむらあしらのまむらむらむら

むらむらむらむらむらむらむらむら

むらむらむらむらむらむらむらむら

瘦るのむらむらむらむらむらむら

がむらむらむらむらむらむらむら

たる瘦るむらむらむらむらむらむら

はむらむらむらむらむらむらむら

あむらむらむらむらむらむらむら

清前子作 國の軍路ともひ

皆くむらむらむらむらむらむら



しあぐ作 <sup>口</sup> 兵部軍務局甲一

あぐあきしあぐあきたる <sup>口</sup> 兵部軍務局甲一

たるき刀と持やさききる <sup>口</sup> 兵部軍務局甲一

つらむ武老一騎方つ <sup>口</sup> 兵部軍務局甲一

わくし <sup>口</sup> 兵部軍務局甲一

はあ <sup>口</sup> 兵部軍務局甲一

稜老甲 <sup>口</sup> 兵部軍務局甲一

ひたるき刀と持瘦る馬と自身

ひくきる武老方 <sup>口</sup> 兵部軍務局甲一

ちあ <sup>口</sup> 兵部軍務局甲一

あ <sup>口</sup> 兵部軍務局甲一

あ <sup>口</sup> 兵部軍務局甲一

あ <sup>口</sup> 兵部軍務局甲一

あ <sup>口</sup> 兵部軍務局甲一











業一番よ絶しあらざるやう申はる  
ぞ。此れも地とまゝくしとていふは  
まゝ邪妙なるまゝなる物の精つと云  
々。全今の縁よあはる。幸一世のまゝの  
まゝ真の偽のまゝなる也。まゝ申奉  
りて人も新詔あはる申はる。此非よ依  
てこれゆゑにひ轉ていふ家もいふまゝ  
はる。いふまゝのまゝ。幸一世のまゝ申奉  
りて。まゝ二十入書なるまゝ申奉り  
まゝ。行もいふ切なるまゝ。いふまゝ  
まゝ。いふまゝ。秘法もいふまゝ。切  
りて。史よ焼あて。まゝ。いふまゝのまゝ。いふ  
まゝ。いふまゝ。いふまゝ。いふまゝ。梅橋  
ねる。いふまゝ。いふまゝ。いふまゝ。いふまゝ。



梅田。起。甲。の。橋。井。の。孫。の。松。村。公。を

て。三。十。の。店。を。孫。と。お。も。む。迄。相。違

あ。ら。ら。ら。自。筆。の。伏。安。塔。の。お。も。む。を

ひ。き。れ。の。常。世。の。氣。を。捨。て。て。く

三。度。以。載。付。う。是。の。孫。の。や。り。と。よ

の。免。れ。の。ひ。の。お。も。む。の。是。の。孫。の

御。親。お。ら。ら。ら。の。お。も。む。の。お。も。む。の

若。法。軍。後。み。の。御。那。給。う。萬。為。人

の。お。も。む。の。お。も。む。の。お。も。む。の。お。も。む。の

の。お。も。む。の。お。も。む。の。お。も。む。の。お。も。む。の

の。お。も。む。の。お。も。む。の。お。も。む。の。お。も。む。の

の。お。も。む。の。お。も。む。の。お。も。む。の。お。も。む。の

の。お。も。む。の。お。も。む。の。お。も。む。の。お。も。む。の

の。お。も。む。の。お。も。む。の。お。も。む。の。お。も。む。の











果<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>

昔<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>

て<sup>ハ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>

昔<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>

昔<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>

海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>

海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>

海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>

海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>

海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>

海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>

海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>

海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>

海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>

海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>海<sup>ノ</sup>魚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ス</sup>







子出修して三摩耶散とて白給ふ

信 地味又

何事 丸体又論の人の神あり

隔ありまう 散まきわたり

どう功德のたまふ 信

功德さう 見率都保永都

三業道 念数起ま提り

いそつては 喜提り

うまきりては 安んず

つらうの社りては 安んず

えらそ佛神とては 安んず

信 仙都とては 率都保

付され 禮とては 敷

まきりて 中保とては 敷







かゝるあきまの及行らるる流るるか  
かの僧の教にちく 毎あきら  
いなる人うらまをあらう人 上は  
あきらまじき名乗作らし 上是る  
出羽の郡司小野良家の娘のあ  
こまらるるあきら果うてさあ物あ  
痛うちあひ町いも古入の遊女を  
て

花のうららうるやま桂の眉まあ  
して白粉を絶る羅綾の衣にほ  
あき桂殿の回まあしき あきら  
あきらあきら作 あきら 酔としくしる  
雨月神子あきらあきらあきらあ  
い 上あきらあきらあきらあ  
あきらあきらあきらあきらあ  
あきらあきらあきらあきらあ



かしきてとをかみしれ籠たりし双輪も  
 清くあはれしあはれしあはれしあはれし  
 怒りてあはれしあはれしあはれしあはれし  
 まつりしあはれしあはれしあはれしあはれし  
 貸りしあはれしあはれしあはれしあはれし  
 命りしあはれしあはれしあはれしあはれし  
 粟りしあはれしあはれしあはれしあはれし

及みたるあはれしあはれしあはれしあはれし  
 衣ありしあはれしあはれしあはれしあはれし  
 乃田島子つりしあはれしあはれしあはれし  
 面ありしあはれしあはれしあはれしあはれし  
 白露ありしあはれしあはれしあはれしあはれし  
 神ありしあはれしあはれしあはれしあはれし  
 頭ありしあはれしあはれしあはれしあはれし







了時うらな言。月さるあふかよひら歌  
閑守のさるも留まらしてさる  
浄衣の袴のひらく 浄衣のさる  
かひらうきさる急ほしあかきとら将衣  
素袖をうらかついて人目あはる通路  
乃月うきゆく闇よきゆくあのおも  
何の夜もなるあはれ志をわらさう

行のまぢやうと行てあはる  
てあはるにあはる三夜あはる七夜あは  
るあはるのあはるあはるあはる  
通のあはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはるあはる  
あはるあはるあはるあはるあはるあはる







山崎のやまの向ひに群まらねを給ふ  
石清水八幡宮の清く流るる川の  
宇治の宮とは一神とての程よあり  
ももとのうらみある鳥居のま  
和の今と感と嘆れそてのさより詠  
りやとぬの なま 母も男の林麿の如くま  
てまれのむねのたふさふさとして

かきつるあはれとてさうもなほあり  
かほあり 中 野草たむあひて蜀錦とつ  
ね 中 桂林雨とつてねのまら 内 洗  
ふ 中 花のたふさふさ 中 まら 中 まら 中 まら  
ま 中 花のまら 中 まら 中 まら 中 まら  
ま 中 花のまら 中 まら 中 まら 中 まら  
ま 中 花のまら 中 まら 中 まら 中 まら







たぐあひの申のほめたまふまゝに

珠更出家のちまひも程も惜まふ

（まされ）<sup>正信</sup> 右様も古き事よしのりなると

僧正偏信まゝにちてあつたて

たごのうらなひもさ<sup>テ</sup>ちておのれに

ちらひたり入の諸もあつて申のり

衣のまゝと樂もあつたおのり

（ま）<sup>ま</sup>あひまゝに申のりたごのり

出家のちまひの清<sup>正</sup>まゝに

まづのちまひもさちまひもさ

まゝに<sup>正信</sup>ちまひもさちまひもさ

結のちまひもさちまひもさ

ちまひもさちまひもさ

ちまひもさちまひもさ











行々しほ見しう名清吹簫宮うて

さきく破る清の御まうむ日のをきて

作しほのし船しほ一しほあひく女君を

かきし。汝男はまじうたの御うて作の

りしほ行をまおらうし女君たの古きと

ひしく戯きしうも侍りうて作

女君紀と申さう男山子付さるをれ

うくうべ汝山の林しほ古男塚女塚を

みきしう一しほあひくしほ見成の男塚

又汝方々の女塚しほ男情女塚よつて

女君たの御しほ作しほ見の支梅の人の中

うく作しほ梅しほ其支梅の人國のうく

名字のうる人かしほ女しほ都の人

男う汝の橋山よしほ小野頼風としほう







亡魂のあつらひをばさるる思ふに又 童の

都の侍者似頼河は等うささしよ

少等うさささるあつらひをばさるる思ふに

きぬの 生らるるあつらひをばさるる思ふに

あつらひをばさるる思ふに

まじりあつらひをばさるる思ふに

あつらひをばさるる思ふに

あつらひをばさるる思ふに

あつらひをばさるる思ふに

あつらひをばさるる思ふに

あつらひをばさるる思ふに

あつらひをばさるる思ふに

あつらひをばさるる思ふに

あつらひをばさるる思ふに



又立のまゝのりしり  
貫くも男の昔と出しくれ丸  
一時どわつと書一吹くは跡の世  
はもあつと書一吹くは跡の世  
あつと書一吹くは跡の世  
あつと書一吹くは跡の世  
あつと書一吹くは跡の世  
あつと書一吹くは跡の世  
あつと書一吹くは跡の世  
あつと書一吹くは跡の世  
あつと書一吹くは跡の世

上  
信の道と同道なりしり  
つづくは河よりなるまき  
守は女より女塚に對し又男山  
と中も其墳を具ぬ我幻なり  
あつと書一吹くは跡の世  
あつと書一吹くは跡の世  
あつと書一吹くは跡の世  
あつと書一吹くは跡の世  
あつと書一吹くは跡の世  
あつと書一吹くは跡の世  
あつと書一吹くは跡の世  
あつと書一吹くは跡の世  
あつと書一吹くは跡の世  
あつと書一吹くは跡の世

圖字

也

邪婦の悪鬼なりと書く

く其念力も道もりしり



















